

全日本、「郷里仙台」で松澤が制す

山本英勝・村越 真

年度の最後を締めくくる全日本大会が終わった。村越の連覇にストップがかけられ、松澤俊行が史上6人目のチャンピオンになった。

鹿島田、今回も2位に

鹿島田は後半こそいいペースのレースを展開したものの、前半のスローペースが響いて今回も2位と涙をのんだ。一方ワールドゲームズに向けて気合いのこもる加賀屋が、序盤のミスに関わらず、3位に入った。

女子は金並が連覇。2位中村正子、3位金子恵美と、女子のメダリストはフレッシュな顔ぶれとなった。

M21E優勝者 松澤俊行に聞く

— ゴールしてからの感触はどうでした？

平均的な出来のレースでした。レース前も注意していたのですが、ミスをしたときに大きくしないように、ということについては達成できたので、納得してゴールしました。あとは、他の人次第と言うことで、優勝は決して確信でなかったのですが落ちついて待つというぐらいのレースは出来たと思います。

— レース前のマガジンインタビューでは、3割打者の気持で臨みたいと言っていたけど、そのような気持ちだったのですか？

そうですね。昨日、仙台の山歩きに行っていたとき、思うようにスピードの上がないところがありました。そういう状況でも、「みんな一緒だから仕方ない」という事前の心の準備が出来ていました。そういうことから、前話したように、落ちついて、力まず、必要以上に怯えることもなく、レースを迎えることができたと思います。（今日のレースの後半にあったタフで走りにくい状況

も、受け入れるべきものだと考え、焦らずこなす事ができたので、それが良かったと思います。

— 今まで目標としていたところに立てて、どういう気持ちでしょう？

本当に嬉しいです、一年間目標にしてきたものなので。あと回りの評価でも優位というのはあったのですが、自分としては村越さんと鹿島田さんに対してチャレンジャーという気持ちが強かったのです。それであって、今日優勝できたのは、嬉しいです。とにかく嬉しいです。

— ラップを見るとトップのラップはないようだけど、そこらへんはレース展開として意識していた結果ですか？

ちらほらトップのラップもありますけれども、優勝者の割には多くないですね。あと、僕は優勝しないときもベストラップが多いほうなので、それを考えたら、予想以上に少ないと思います。ただ、レース中の感触として、ミスをしたときにそれを大きくしない、そこについては達成できていたので、レース全体としてはまとまったという感じだと思います。

— そのまとめようという意識は全日本に向けての課題だったのですか、それとも一年間をかけてのものだったのですか？

ミスへの対処は一年間テーマにしていました。ミスをするのは、誰にでもあるので、それを大きくしないことを意識していました。これまで、特に一年以上前のレースについては一回のミスを分単位にしてしまうことが多かったので、その克服を課題としてきました。それをある程度達成できるようになったので、他の大会でも勝てるようになり、そういう意味ではだんだんよくなってきていると思います。こういうプレッシャーがかかる全日本大会でそれができなかったら、出なおしだなと思っていました。今日はそういう意味でまとめられたのは良かったと思っています。

ます。

レース中は本当に走りながら苦しさもありました。でも、全日本にもオリエンテーリングにも限らず、勝つ人が気持ち良く戦っているか、というと必ずしもそうでないということを、いつも自分に言い聞かせていました。とにかく、そういう（苦しいという）感触もあるだろう、けど今あることに集中していこう、という風に気持ちを切らさずにやってきたので、その点では評価できるレースだったと思います。

— そういう風に自分の言い聞かすような言葉はいくつか今回用意していたのですか？

自分に対する言い聞かせる言葉と言うのは事前にいくつか用意しています。今回は、「とにかく1秒勝てば勝ちなので延長戦に持ちこんでも勝つ」という気持ちが大切だと思っていました。あともう一つは、あと足場も悪いと予想していたのですが、そういうところで「転んで痛いと感じた時は、闘志にスイッチが入るとき」というような気持ちで今日はやってきました。それは、役に立ちました。

— チャンピオンとしての心構えをお聞かせください。

オリエンテーリングに対する取り組みという意味ではチャンピオンが（スポーツ全体を）代表しているという気持ちがあるので、今まで以上に日々の生活と練習をしっかりとしていくという気持ちもあります。また、これにより、世界選手権代表と、ワールドゲームズ代表と言うことも決まりみたいなので、世界選手権で決勝を走れるような準備を継続していくということだと思います。やはり、今日のようなレースのあとに15キロの世界選手権のクラシック決勝をきちんと走れるような、準備が国の代表としては大切なと思いますので、そういう意味でもこれからも気を引き締めてやっていきたいと思っています。

松澤俊行が制した、昨年度の全日本選手権。「負けた悔しさと根っからの分析好き」で、2位鹿島田は、翌日選手たちがとったラップタイムの分析に励む。数字は雄弁に、選手たちのレースの様子を再現してくれた。

1 松澤俊行

はっきりいっていわゆる我々の持つ「松澤らしい」というイメージのレースではない。巡航スピードは101。常に90台をたたき出す彼にしては決して速くない。一方ラップの荒れるレース展開でミス率は6%と、参加選手中もっとも低い。彼も決してパーフェクトのレースをしているわけではない。2、5、11、12とミスは犯している。しかし、他のランナーがことごとく1分以上のミスを行なっている中で彼はすべてのミスを1分程度以内に抑え、レースを大事に進め、最後の得意のスパートで優勝を確実にした。もしかしたらまっちゃん自身は、レース後にそれほど大きな手ごたえを感じなか

ったかもしれない。しかし豊富なトレーニングに裏づけされたスタミナとスピードが、彼に地図読みとセルフコントロールに集中する余裕を与えたに違いない。

2 鹿島田浩二

前半と後半のレースペースがあまりにも違う。前半はどこが致命的というわけでもないが、7番の時点ではまったく精細がなくトップと3分半の差をつけられている。一方後半はほぼミスのないレースをしているが時すでに遅し。前半のスローペースは本人も自覚しているが、戦略的な面はもちろん、コンディショニングという面でも課題が残る。

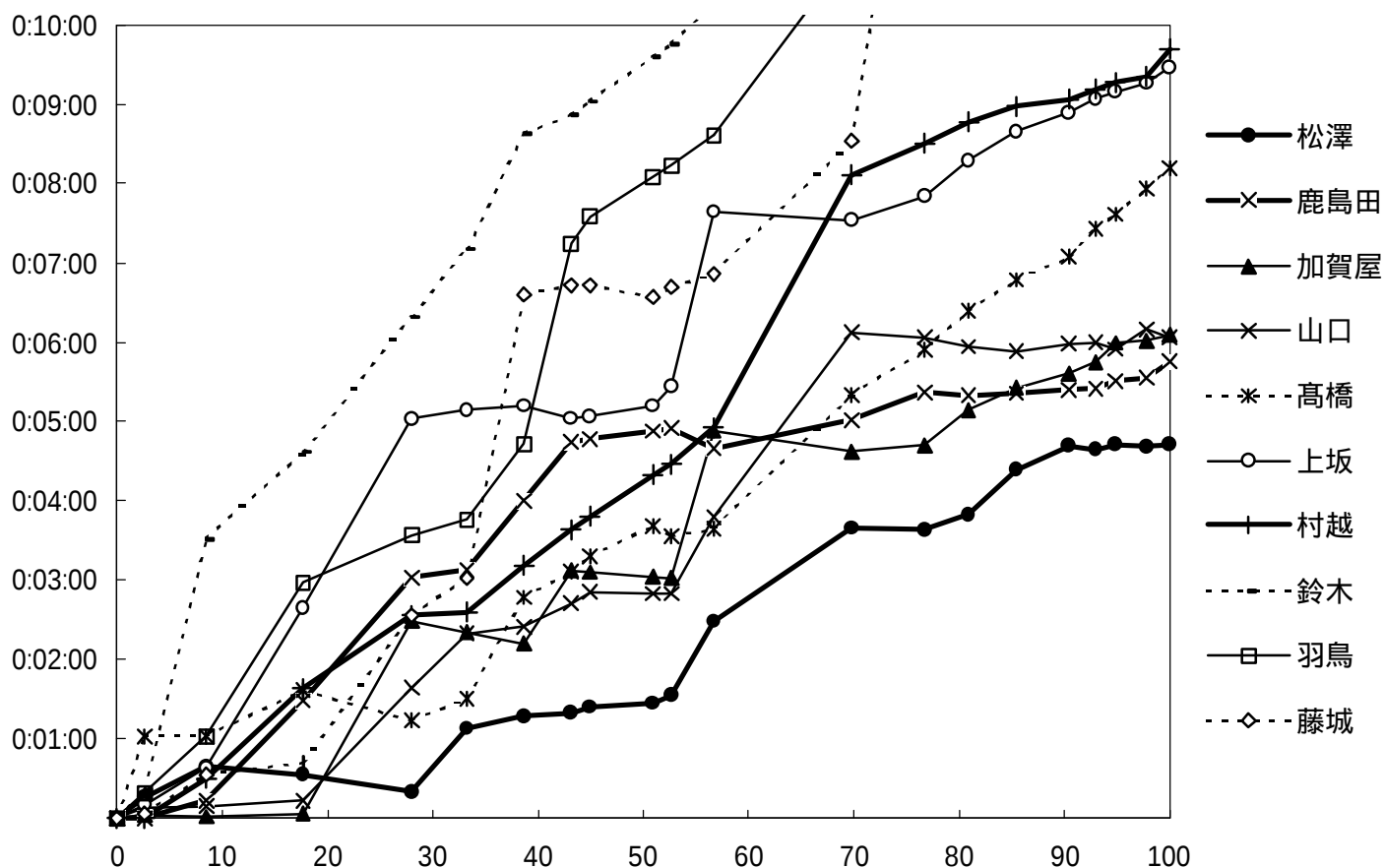
3 加賀屋博文

上位者で2番目に高齢の選手であることを疑いたくなる。巡航スピードも参加選手中1位。この日もっとも切れを感じるレースをしていただろう。前半はイーグルとボギーを繰り返す出入りの激しいレースが続き、階段状にグラフが推移する。11番のミスが致命的となり優勝は厳しく

なったがそれでも12番の要となるロングレグで他者に大きく差をつけてベストラップをとる。この時点でも優勝へのわずかな望みをもってしたが、後半13番以降、やや疲れが見えたのかそれまでの切れが見られず15番で鹿島田にかわされて3位となった。

4 山口大助

加賀屋同様キレイのあるレースを見せている。中盤では2位に浮上しトップも視野に入れるが12番で5位に転落した。しかしその後の追い上げが脅威的。グラフが逆勾配(AVE3より速い)でトップラップを続出し上位に迫る。しかしラスポ→ゴールの脅威ラップも届かず、加賀屋にわずか1秒差で4位となる。後半のスピードにポテンシャルを見せている分、4、12番といった本来のナビゲーション能力以外の要素を含んだレグでラップを落としたのは本人も悔しいだろう。



5 高橋善徳

1番でやや出遅れるが、前半多くのランナーがてこずるロングレグを無難にこなして4番では2位に。6番でミスをするものの、中盤をこらえて11番では再び2位に浮上する。しかし12番のロングレグでのミスを境に後半ペースダウンし、鹿島田、加賀屋、山口にかわされてしまった。最後のランニング部分で上位選手との明確な差があり、後半のスタミナに課題が残るか。若い選手であるがミスを起こしやすい条件の中でレース運びのうまさを感じる。

6 上坂寛之

加賀屋、山口に似た傾向を示す。4

番までと11番のミスを除けばフラットにグラフが推移する。中盤以降は11番を除けばいいリズムのレースだったのではないかな。一方1つのミスを最小限に抑えてレースをまとめるという点では課題が残るか。

7 村越 真

致命的なルートミスとなった12番を除いても、この日のレース内容ではメダルは苦しかった。ベテランらしく、スムーズなグラフで推移しており、ルートミスという点を除けばもっともミスが少ないレースをしている。しかしグラフの傾きがいつも以上に大きく(AVE3からの割合が大きい)、浮上できなかった。2月のショートで見た切れを考えると、

コンディショニングに問題があったのではないかな。

10 鈴木卓弥

2番で大きくミスをして苦しいスタートとなる。その後も中盤までペースの上がらない厳しいレースが続く。コンディションが厳しかったのだろうか。12番の時点では、10位台を固めた選手と変わらない位置にいる。しかし、トレーニングに支えられた底力を発揮し、12番以降は得意のスピード感のあるレグで上位と変わらないペースで追い上げ10位に滑り込む。あまり目立たないが彼は今回の予備セレ4回すべてを通過しており、若い頃に比べて安定感を感じる。

平成 12 年度全日本大会 日本選手権クラス上位者成績速報

M21E

1 松澤俊行	28 アベックス	1:17:49
2 鹿島田浩二	30 東京 OL クラブ	1:18:49
3 加賀屋博文	32 東京都庁	1:19:08
4 山口大助	25 ES 関東 C	1:19:09
5 高橋善徳	23 筑波山を登る会	1:21:25
6 上坂寛之	31 多摩 OL	1:22:35
7 村越真	40 静岡 OLC	1:22:55
8 安斎秀樹	29 AC アルプス	1:22:56
9 大嶋真謙	21 北大 OLC	1:27:02
10 鈴木卓弥	30 横浜 OL クラブ	1:27:03
11 新隆徳	33 入間市 OLC	1:28:13
12 羽鳥和重	35 川口 OLC	1:28:45
13 藤城公久	28 つくば ROC	1:29:04
14 多田宗弘	26 多摩 OL	1:29:34
15 菅原琢	35 多摩 OL	1:30:01
16 奥村理也	30 ウルトラクラブ	1:30:27
17 山本英勝	30 横浜 OL クラブ	1:32:08
18 柳下大	26 Forester	1:32:19
19 大西淳一	27 神奈川県横浜市	1:33:51
20 篠原岳夫	23 埼玉県川越市	1:33:59

W21E

1 金並由香	29 東京都豊島区	1:11:18
2 中村正子	26 京葉 OL クラブ	1:14:01
3 金子恵美	25 上尾 OLC	1:14:14
4 宮川祐子	38 筑波大 OB 愛好会	1:14:21
5 渡辺円香	25 東京都江戸川区	1:14:41
6 高野由紀	41 東京 OL クラブ	1:17:01
7 竹内亜希子	31 多摩 OL	1:17:05
8 草野望	32 ES 関東 C	1:18:33
9 三好暢子	32 上尾 OLC	1:19:10
10 落合志保子	27 OLC ルーパー	1:21:08
11 田島利佳	29 みちの会	1:21:16
12 塩田美佐	22 筑波大 OL 愛好会	1:21:17
13 宮本知江子	37 京葉 OL クラブ	1:24:31
14 木植早生	40 Team 白樺	1:25:20
15 志村聡子	28 横浜 OL クラブ	1:31:40
16 志村直子	26 かすいち倶楽部	1:33:14
17 山本康世	28 杏友会	1:44:33

全日本不成立を考える

秋ごろから配布された要綱にコントロールの指名がないのを見て、「どうなるんだろう？」そう懸念していた人もあったと聞く。その懸念は残念なことには的中してしまった。

今回の全日本では、コース9とコース11において不成立が発生してしまった。その事実関係は以下のよ

うなものであった。

コース9(M18A、W21A)において、コース図の10番と11番コントロールの間にコントロールを示す円が記されていたが、その場所にはコントロールはなく、またデフにもそのコントロールを示す位置説明欄はなかった。競技者の中の何人かは、このコントロールを訪れた

が、実際にコントロールはなかった

コース11(M50A、M55A、W35-40A、OA)において、位置説明に示されていたのとは違うコントロール番号のコントロールがあった。OAにおいては、スタート前にこのことが発覚し、訂正が入ったため、不成立は免れたようである。

この日は、これら以外にも位置説明やコントロール記号の訂正が公式

掲示板のみならず、スタート地点でも掲示されていた。上記ミスはこれらのチェックの目をかいくぐって残ってしまったものようだ。

このいずれのケースについても、主催者が競技不成立を決定したが、それに対して参加費返金の提訴と事実関係の確認および再発防止策の検討が参加者から要望された。最大限の努力をしてもミスを完全に防ぐことはできない。参加者はそのミスに対して寛容であるべきだが、今回のケースはちょっと事情が違う。

公認大会においては任命されるべきコントローラが今回最後まで任命されていなかったのだ。コントローラを任命し、コントローラが大会の地図、コースその他イベントとしての適切性について必要なアドバイスや提言を行うことは、競技規則に定められた事項である。いわば主催者は競技規則違反を犯したとさえ言える。またプログラムを見る限り、競技責任者も特定されていない。もし現実にもそうだとすれば、これもまた競技規則違反である。

コントローラがいれば、二つのコースの不成立は防げただろうか。もちろん、推測の域に過ぎないが、通常のコントローラが果たしている職務からすれば、高い確率で防げたであろう。

競技者がモラルや規則を守らなければならないことは当然である。そしてオリエンテーリングでは、主催者（主管者）もまた、コースを通して競技者と対峙するという意味で、一種対戦相手にも近い立場である。そのことだけを考えても、主催者もまた競技規則に対して敏感でなければならないはずである。

不成立という事態にはつながらなかったものの、地図に関しては特に通行可能度の表記に関して恣意性が見られ、随所に信頼できない場所があった。またコントロールへのアタックに直接影響するゆがみなども散見された。ここ数年の全日本大会と比較しても、全体にコントロール不足の感は免れない。

もちろん、考慮しなければならない事情もあったようである。その短い期間に準備を進める主管者としては、当然精一杯の努力はしたはずで

ある。であれば、一層のことコントローラが任命されなかったこと、JOAの技術的なバックアップ体制が機能しなかったことは悔やまれる。

なお、この問題について、競技専門委員長の森田輝雄氏は、再発防止のために、コントローラの派遣方法の見直しを検討しているとのことであった。

この件については、主管者から詳細な情報が入手出来次第、続報としたい。

不可抗力のトラブルも発生

主管者からみれば不可抗力のトラブルも発生した。最終コントロールのパンチ器具（6つ）のうち一つが、競技中に外れていた。このことに気付かない選手は、結果としてコントロールカードにパンチを押さない状態でゴールし、失格扱いになっていた。

この件に関しては調査依頼があり、上記状況が判明したので、失格取り消しとなった。これは競技規則17.4によるものである。

この点に対して、M21E4位の山口大助より提訴があった。概略の内容は、「提訴者は、最終コントロールパンチ器具に不備があることに気付かず、再度パンチをしておいた。これに要した時間によって、提訴者は不利益を被った。パンチしないでゴールしたものを失格としないなら、提訴者の受けた不利益に関しても考慮されるべきである」とのことであった。

この提訴に基づき、失格取り消しを受けた選手とその上下の選手の成績を検討されが、失格取り消しを受けた選手が不公平に利益を受けたとは認められなかったため、裁定員は提訴を支持しなかった。

この点については、後日、山口氏は「大会プログラムには、「パンチ器具故障時には、パンチパターンを憶えてくること」という一文があり、自分の行動はそれに従ったものだ」とし、プログラムに書かれたことと競技規則の間には食い違いがあるのではないかと、このような食い違いに対する明確な指針がほしい、と訴えた。

この件は、確かに主管者の責任にはないトラブルである。しかし、パンチチェックの判定基準には大会によるばらつきがあることも確かである。規則をいかに運用するかという点でも、よりコントロールされた状態になることが期待される。



全日本大会でのワンショット

連続出場者は何人？

17年前の第10回全日本の時に、連続出場者をチェックしてみました。その時の連続出場者は、女子5名、男子26名でした。それからすでに20年近くたち、すでに亡くなっている方もおられます。

10回以降の全ての成績表にあたった訳ではありませんので、確かではありませんが、以下の方は連続出場の可能性があります。最大でも、もう12人に絞られています。もし私はもう欠席がある、私は忘れられている、そんな情報があれば編集部までお寄せいただければ幸いです。

阿久沢充(66)、梅野武康(80)、井上幹男(55)、小笠原揚太郎(60)、谷正春(52)、宮川達哉(38)、吉田智昭(68)、山崎正治(79)、村越真(40)、池田富子(64)、芝聖子(57)、山本のり子(69)

なお今回の最高齢者は、ともに東京OLCの磯谷忠彦(84)さんと廣田あや子(76)でした。また、最年少は、女性では広島OLCの伊藤瑠美子(8)さん、男性では東海大学付属小の村越怜(10)さんと町田市相原小学校の宇野駿介(10)さんでした。